

否定形式と共起していない 副詞「あんまり」をめぐって

— 評価的な意味について考える —

今 西 利 之

要 旨

否定形式と共起していない副詞「あんまり」は、「状態性の意味を有する語(句)と共起して、その語彙的な意味を程度の側面から限定する。」という特性から、命題に属する程度副詞と考えられている。その一方で、この副詞が用いられている実例を観察してみると、その使用状況にある一定の傾向がみられ、そのことから話し手の主観的な判断である「評価的な意味」の存在が浮かび上がってくる。本稿では副詞「あんまり」有するこのような二重性格を検証するとともに、「評価的な意味」という概念を文法論の枠組みの中に位置付ける足がかりを探る。

1. はじめに

副詞といわれる語群の中には、多種多様な文法的な機能、意味を有するものが含まれている。現在、山田(1936)を出発点とする副詞の三分類(命題に属する「情態副詞」・「程度副詞」とモダリティに属する「陳述副詞」)が一般的に用いられているが、その他にも松下(1974)のように「程度副詞」「陳述副詞」を一括して「副詞」とし、「情態副詞」の大部分を用言の一種とする説もある。また、さらなる下位分類の過程の中で、さまざまな名称をもつ副詞が登場している⁽¹⁾。このような状況に対して、程度副詞を考察の対象としている工藤(1983)は、これまでの学説の多くが「厳密なる二分法」によるものであるという指摘をした上で、程度副詞の性格を「陳述的には肯定・平叙の叙法と関わって評価性をもちつつ、ことがら的には形容詞と組み合わせさせて程度性をもつ、という二重性格のものとして位置付けられる」と述べている。このことは、あるひとつの言語形式が相反する概念(「陳述」と「ことがら」)を併せ持つ可能性があることを示唆しているのではないと思われる。さらに興味深いのは、程度副詞の陳述的な側面として「評価」という概念を認めている点である。この概念は、語の意味記述や文法現象の説明に広く用

いられてはいるものの、命題・モダリティという文の基本的な枠組みの中に一定の位置を占めているとは言い難いのが現状である。本稿の目的は、工藤(1983)が指摘する程度副詞の二重性格を、否定形式と共起していない副詞「あんまり」を考察の対象として検証し、そのことから「評価」という概念を文法的な枠組みの中に位置付ける足がかりを探ることにある。

2. 程度副詞としての性格

副詞「あんまり」を副詞の三分類に基づいて位置付けるとすれば、「程度副詞」ということになる。「程度副詞」は、「状態性の意味を有する語(句)と共起して、その語彙的な意味を程度の側面から限定する。」と規定されるのが一般的である。この点を、実例をもとに確認しておこう。

まず、状態性の意味を有する語(句)と共起するという文法的な機能についてであるが、状態性の意味を有する語の代表的なものは形容詞である。次の(1)(2)では、副詞「あんまり」は形容詞と共起している¹⁰⁾。

- (1) そして何か云おうとしたようでしたが、あんまり嬉しかったと見えて、もうなんにも云えず、ただおろおろと泣いてしまいました。

(宮沢賢治「銀河鉄道の夜」)

- (2) 「あんまり贅沢よ、御飯だって気に入らなきゃ途中でやめちゃうし、水はいやだっていってジュースしか飲まないし」

(野坂昭如「アメリカひじき」)

動詞の中にも「疲れる」「困る」のように状態性の意味を有するものがあり、副詞「あんまり」はこれら状態性の意味を有する動詞と共起する。次の(3)(4)はその実例である。

- (3) 耕助もさっきからあんまり困ったためにおこっていたのもだんだん忘れて来ました。そしてつい三郎といっしょに笑い出してしまったのです。

(宮沢賢治「風の又三郎」)

- (4) 「もう少し歩けませんか」と三四郎は立ちながら、促す様に云ってみた。「難有う。これで沢山」「やっぱり心持が悪いですか」「あんまり疲れたから」

(夏目漱石「三四郎」)

副詞「あんまり」は状態性の意味を有していない動詞とも共起する。この場合、「程度の側面から限定する」という程度副詞としての用法から「量（数量・時間量など）を表す」という量副詞としての用法へとずれ込んでいく⁽³⁾。次の(5)は数量、(6)は時間量を表している実例である。

- (5) 「つかれたつかれたすっかりつかれた 脚はまるっきり 二本のステッキ いったいすこうし飲み過ぎたのだし 馬肉もあんまり食いすぎた。」 (宮沢賢治「銀河鉄道の夜」)
- (6) 何かの都合で私の方が遅れたりして、「あんまり待たせ過ぎたから、もう帰ってしまったかな」と、案じながら行って見ると、矢張キッチンと其処に待っています。 (谷崎潤一郎「痴人の愛」)

この他、次の(7)から(10)で示すように、相対的な広がりを持つ時間・空間の名詞、副詞、連体詞とも共起する⁽⁴⁾。

- (7) (筆者注：道端に生えているシソの葉を見ながら)「あんまり道傍にあるからよ。埃がたかって汚らしいでしょ」 (曾野綾子「太郎物語」)
- (8) 「オイ、あんまりとやかく言うなら、もうやめようじゃないか」 (阿川弘之「山本五十六」)
- (9) 「昨日は恐ろしかったな。あんまり大きな音がしたもんで、おらあ引っくり返ったかと思うたぞ」 (夢野久作「いなか、の、じけん」)

次に、程度の側面から限定するという意味的な役割についてである。

- (10) 昼からあんまり頭が痛むので、娘と二人で黒犬を連れて、日在浜の方へ散歩に出て見た。 (林芙美子「放浪記」)
- (11) 昼から頭が痛むので、娘と二人で黒犬を連れて、日在浜の方へ散歩に出て見た。

(10)の実例とそこから副詞「あんまり」を削除した(11)とを比較すると、(10)では「散歩に出かけてみる」という行動を起した原因・理由として、頭痛の程度がある一定の基準を超えていたことがあげられているのに対して、(11)

では頭痛の程度ではなく頭痛の発生そのものが原因・理由としてあげられていることがわかる。また(10)には「頭痛の程度がある一定の基準を超えていなければ散歩に出て見なかった」という含意があるのに対して、(11)には、「頭痛が起こらなければ散歩に出て見なかった」という含意があることから、副詞「あんまり」がそれと共に起している語(句)の語彙的な意味が表す状態の程度を表していることが確認できる。

- (12) (筆者注：話し手は銀次郎が来るのを待っている。)「あんまり待たせると出かけちゃうぜ。」
(石川淳「焼跡のイエス」)

(12)は待たされていることへの不満を述べた文であるが、その中で話し手は、自身が定めたある一定時間内はこのまま待っているが、その時間を過ぎたら新たな行動に移ることを表明している。(12)に対してこのような解釈が成り立つのは副詞「あんまり」の存在による。

- (13) 「いったいどうしたっていうの、十五日の日に酔っぱらって、また来ると云って出てったつきり、からっ風に飛ばされた枯葉みたいに音沙汰なし、そのあげくさぶちゃんに背負われて来るなんて、あんまりだらしがないじゃないの、しっかりしてよ」
(山本周五郎「さぶ」)

(13)は、聞き手に対して「だらしがない」という判断を話し手がくだしている文である。このような判断をくだした根拠として聞き手のこれまでの行動が列挙されているが、「十五日の日に酔っぱらう」「また来ると云って出てったつきり、音沙汰がない」ということだけで十分「だらしがない」という判断が成り立つところに加えて、「さぶちゃんに背負われてくる」という行動が話し手の定めたある一定の基準を超えてしまう原因となり、副詞「あんまり」をともなった「あんまりだらしがない」という判断につながったものと考えられる。これらの考察から、副詞「あんまり」は、共に起している語(句)の語彙的な意味が表す状態の程度がある一定の基準を超えていることを表す、ということが出来る。そして文の知的情報量が増加していることを考えると、副詞「あんまり」は命題に属する程度副詞ということになるのである。

3. 「評価」という概念について

この節では、「評価」という概念に対する本稿のとらえ方を明らかにする。

副詞の研究において「評価」という概念が問題となるものとしては、「幸い」「残念ながら」に代表される「評価の副詞」をあげることができる。

(14) 幸い、私達は予定通り仕事を終えることができた。

(15) 残念ながら、我々のチームは試合に負けてしまった。

(14)(15)において、「幸い」「残念ながら」は、それぞれ「私達が予定通り仕事を終えることができた」こと、「我々のチームが試合に負けた」ことを対象として、話し手が発話時において自らの価値判断に基づいてどのような評価をくだしているのかを示している。これらの表現は、命題内容の情報量に増減を加えていないこと、話し手による発話時における価値判断であることから、モダリティに属する表現であると考えられる。

ところで、「評価」という概念が問題となるのは、なにも「評価の副詞」に限られるわけではない。

(16) 今日の試合は雨のおかげで中止になった。

(17) 今日の試合は雨のせいで中止になった。

(16)(17)は「降雨が原因で今日の試合が中止になったこと」を命題内容としてあらわしている点では共通している。しかし(16)はその命題内容を話し手が好意的にとらえていることが表現されているのに対して、(17)は好意的にはとらえていないことが表現されている。このことは、(16)(17)に評価の副詞「幸い」「残念ながら」を共起させた文の文法性の差から確認することができる。

(18) 幸い、雨のおかげで、今日の試合は中止になった。

(19) ??幸い、雨のせいで、今日の試合は中止になった。

(20) ??残念ながら、雨のおかげで、今日の試合は中止になった。

(21) 残念ながら、雨のせいで、今日の試合は中止になった。

ある事態を好意的にとらえるのか好意的にとらえないのかはその事柄に対す

る話し手の価値判断のあらわれである。例えばプロ野球において連勝中のチームと連敗中のチームの試合が「降雨中止」なった場合、連勝中のチームは「降雨中止」という事柄を好意的にとらえないことが多いので、そのチームの監督は(17)のような表現を選ぶだろうし、連敗中のチームの監督は「降雨中止」という事柄を好意的にとらえて(16)のような表現を選ぶことが多いだろう。つまり、話し手が変れば同じ事柄を対象としていたとしてもその事柄のとらえ方が異なるということである。そして(16)(17)では、事柄に対する話し手のとらえ方の違い、ここでは価値判断のありよう(すなわち評価)が「～おかげで／～せいで」という接続形式に焼き付けられているのである。一方で、このような価値判断のありようを言語表現に焼き付けずに中立的な立場で事柄を表現する場合も考えられる。例えばニュース番組のアナウンサーは、述べようとする事柄に対して個人的な感情を差し挟まずに報道することが求められるので、「降雨中止」を伝える場合には次のような表現を選ぶことが予想される。

(22) 今日の試合は雨で中止になった。

同じような例を、形容詞述語文を使って考えてみよう。田舎暮らしをしてきた話し手が都会に引越し、初めて繁華街に出向いたとしよう。繁華街は人通りが多く、人々は流行りの服を身につけている。また歩行者の目を引き付けるためのネオンサインがあちらこちらで輝いている。さらに、店舗からはアップテンポの曲が大音量で流されている。話し手はこの町の印象をどのように表現するであろうか。

(23) この街はにぎやかだ。

(24) この街は騒々しい。

(23)は話し手が街の印象を好意的にとらえている場合、(24)は好意的にはとらえていない場合であると考えられる。

以上のことから、同じ現実世界の客観的な事柄を対象としていても、話し手による事柄に対する価値判断のありように応じて、異なる言語形式による事柄の切り取りが行われ言語表現化されるということ、また話し手による事柄に対する価値判断のありようが、これを表現することを専らの機能とする

「評価の副詞」のみならずさまざまな言語形式に焼き付けられ、それが固定化している可能性があるといえる。そこで、本稿では「評価」という概念を「現実世界の客観的な事柄を切り取り言語表現化する際に言語形式に焼き付けられる話し手による事柄に対する社会的あるいは個人的な基準に基づく価値判断のありよう」と定義し、議論をすすめることとする。

4. 副詞「あんまり」が有する評価的な意味

この節では、否定形式と共起していない副詞「あんまり」がどのような文脈で用いられているのかを実例をもとに検討し、そこから副詞「あんまり」が評価的な意味を有していることを検証していく。

4.1 原因・理由の副詞節

本稿の執筆にあたり、否定形式と共起していない副詞「あんまり」の実例を691例採集した。その中の397例(約57.5%)が原因・理由の副詞節の中で用いられていた。(25)から(28)はその例である。

- (25) 一日置きに手紙をよこしたり、なんとなくよく世話をしてくれて、
ありがたいのだけれど、きょうは、あんまり大袈裟にはしゃいでい
るので、私も、さすがにいやになった。(太宰治「女生徒」)
- (26) 「あんまり寝苦しいから、縁側へ出て少し涼もうと思います」
(夏目漱石「行人」)
- (27) 耕助は何かもっと別のことを言おうと思いましたが、あんまりおこっ
てしまって考え出すことができませんでしたのでまた同じように叫
びました。(宮沢賢治「風の又三郎」)
- (28) あんまり昨日の空が青かったので、久し振りに、古里が恋しく、私
は無理矢理に汽車に乗ってしまった。(林芙美子「放浪記」)

副詞「あんまり」が用いられているこれらの原因・理由の副詞節とその主節との意味的な関係にはいくつかの特徴が認められる。まず(25)は、マイナスの感情が主節で表され、その感情が生じた原因・理由が副詞節で表されているものである。次の(29)(30)は同様の例である。

- (29) あんまり柔媚でやさしいので、源氏は、ほかの男が忍んできてもこ

う他愛なく身を任せるのではあるまいかと、鋭い不安が胸をかすめたりする。 (田辺聖子「新源氏物語」)

- (30) あんまり自分が若すぎて、私はなぜかやけくそにあいそがつきて腹をたててしまうのだ。 (林芙美子「放浪記」)

これらの例では主節でマイナスの感情が直接的に表現されているが、行動・動きを通じてマイナスの感情が間接的に表現されている場合もある。次の(31)(32)はその例である。

- (31) それまでアップルが提供してきた小型機は、でかい、重い、高いの三拍子そろった小錦クンだ。あんまりふがいないものだから、ポータブルという冗談としか思えない名前の付いた小錦クンを見かけるたびにオレはいつもこの野郎をぶんなぐってやっていたのだが、こいつを徹底的なダイエットに追い込んだのは〈ダイナブック〉をはじめとする一群の絞り上げられたDOSマシンからの圧力だ。

(富田倫生「青空のリスタート」)

- (32) あんまり羨ましくて情なくて口惜《くちお》しくて、思わずホロホロと水晶のような露を机の上に落しました。 (夢野久作「白椿」)

ここで、副詞「あんまり」が用いられている原因・理由の副詞節に対する主節としてプラスの感情を表す表現を用いることができるかどうかテストしてみよう。

- (33) 自由時間が多いので、いやだ
(34) 自由時間が多いので、うれしい。
(35) あんまり自由時間が多いので、いやだ。
(36) ??あんまり自由時間が多いので、うれしい。

(33)(34)の比較から、副詞「あんまり」が用いられていない場合は、主節がマイナスの感情を表す表現でもプラスの感情を表す表現でも文法的であることがわかる。ところがそれぞれの原因・理由の副詞節に副詞「あんまり」を共起させてみると、主節がマイナスの感情を表す表現である(35)が文法的であるのに対して、プラスの感情を表す表現である(36)からは座りの悪さが感

じられる¹⁹⁾。このことから、副詞「あんまり」が共起している原因・理由の副詞節に対する主節にはプラスの感情を表す表現を用いることができないということがわかる。同時に、このことは、現実世界の客観的な事柄としてある一定の基準を超えた状態にあることが好意的にとらえられていないこと、そしてそのような評価的な意味が副詞「あんまり」に焼き付けられていることのあらわれではないかと考えられるのである。

次に(26)は原因・理由の副詞節で述べられている事柄、特にある一定の程度を超えた状態を改善するための方策が主節で述べられている例である。同様の例を次の(37)(38)で提示する。

- (37) あんまり、つらいので、吾一は工場を逃げだそうと思った。
(山本有三「路傍の石」)
- (38) 「あんまり耳くそがたまつとるで、ちょっとそうじしてやらァ」
(新美南吉「久助君の話」)

事柄の改善を図るということは、改善の対象となる事柄（原因・理由副詞節で述べられている事柄の程度がある一定の基準を超えた状態にあること）に何か不都合な点、問題点が存在していること、すなわちそのことが好意的にとらえられていないことのあらわれであると考えられる。ここからも評価的な意味が副詞「あんまり」に焼き付けられていることがうかがえる。

(27)は副詞節で述べられている事柄、特にある一定の程度を超えた状態が原因となって生じた望ましくない事柄が主節で述べられている例である。同様の例を次の(39)(40)で提示する。

- (39) いつかの朝など、走りながらあんまり笑いすぎたもんで、いつもよりか十分も遅れてしまった。
(アラン・シリトー〈河野一郎訳〉「長距離走者の孤独」)
- (40) 「あんまり小さい時から、重い物持ったんで背が伸びなくなっちゃったんだよ、な、そうだな」
(曾野綾子「太郎物語」)

ここで、副詞「あんまり」が用いられている原因・理由の副詞節に対する主節に望ましい事柄が来られるかどうかをテストしてみよう。原因・理由の副詞節に対する主節に望ましい事柄が来ることは次の(41)が示すようにもちろ

ん可能である。

(41) たけし君、よかったね。一生懸命勉強したから、合格したんだよ。

ところが(41)の原因・理由の副詞節に副詞「あんまり」を入れた次の(42)はすわりの悪い文になる。

(42) ??たけし君、よかったね。あんまり一生懸命勉強したから、合格したんだよ。

このことから、副詞「あんまり」が用いられている原因・理由の副詞節に対する主節に望ましい事柄が来られないことがわかる。その一方で、「合格する」という事柄が望ましくない事柄になる場合も考えられないわけではない。例えば、合格を望んでいないにもかかわらず、その意思に反して合格してしまうという状況である。(次のような状況が現実是否存在するかどうかは別にして、)勉強に対する一生懸命さの程度がある一定の基準を超えたことが原因となって、望んでいない「合格」という結果が生じたとしたら、次の(43)は容認することができるように思われる。

(43) たけし君、残念だったね。あんまり一生懸命勉強したから、合格したんだよ。

この現象は、原因・理由の副詞節内に副詞「あんまり」が存在することによって、主節の意味がその影響を受けているということを表している。しかも副詞「あんまり」が影響を与えた主節の意味とは、現実世界の客観的な事柄が望ましいものであるかの望ましくないものであるのかという「評価的な意味」であると考えられる。

最後に、(28)はある一定の基準を超えた状態にあることが原因・理由となって生じた想定外の事柄や予定外の行動、あるいは意思に反するような事態が主節で述べられている例である。同様の例を次の(44)(45)で示す。

(44) あんまり変っていたものですから、つい口ををらせたのです。
(芥川龍之介「二人小町」)

- (45) 伯父様のお仕打ちがあんまりひどいから、ぼくはもう、きみをあきらめてしまおうと決心したんだけど、でも別れたら、どんなに恋しく思うだろうなあ……。 (田辺聖子「新源氏物語」)

想定や予定及び意思に反する事柄を生じさせた原因・理由は当然好意的にとらえられているということはできないだろう。

4.2 条件節

次に目に付くのが条件節における副詞「あんまり」の使用である。

- (46) あんまり山に身を入れすぎて、ばかな真似をしたら、それが、君自身の足をひっぱることになる。 (新田次郎「孤高の人」)
- (47) もっとも古本屋なんて商売は、あんまり明るくちゃ工合が悪う御座いますナ。 (夢野久作「悪魔祈祷書」)
- (48) ぼくもあんまりお客さんがいっばい来ると嬉しくない。 (松平維秋「松平維秋の仕事」)

副詞「あんまり」が用いられている条件の副詞節と主節との意味的な関係にもいくつかの特徴が認められる。まず、(46)は一定の基準を超えた状態になることで生じる望ましくない事柄を主節で提示することによって、聞き手への忠告を行っている例である。同様の例を次の(49)(50)で示す。

- (49) あんまり読むと近眼になるよ (林芙美子「放浪記」)
- (50) しかし、あんまり夜更かしをすると身体に触るぞ (夢野久作「鉄鎗」)

次の(51)(52)は一定の基準を超えた状態になることで聞き手に課せられるペナルティを主節で提示することで聞き手に対して忠告を行っている例である。

- (51) 「このへちま野郎ども」男の人足なら赤鬼はそうどなる、「あんまりいい気になってのさばると、野郎ども石を担がせてくれるぞ」 (山本周五郎「さぶ」)
- (52) あんまり人を馬鹿にすると電話を切ってしまうよ。 (夏目漱石「我輩は猫である」)

「忠告」は聞き手に向けられるものであるが、それが話し手自身に向けられると、自らの行動を戒め、制御することになる。次の(53)(54)はその例である。

- (53) 成功談も無論ある。バラック都市の人々は、寄るとさわるとこの種の新発見の話ばかりしている。しかし、あんまり紹介すると一種の奨励になるから、その中でも最も新しい、且つ事実と相違ないところを総合して二三紹介する。 (杉山萌圓「東京人の墮落時代」)
- (54) あたし今のうちにちょっとお湯に行って来ようかしら。あんまり遅くなるとまたおっくうになるから。 (石川淳「焼跡のイエス」)

(46)及び(49)から(54)の主節における、聞き手への忠告、話し手自身への戒めあるいは自身の行動の制御という表現機能は、条件節の副詞節で述べられている事柄の実現を阻止しようという話し手の心的態度のあらわれであると同時に、阻止の対象となる事柄(すなわち条件の副詞節で述べられている事柄)が好意的にとらえられていないことのあらわれでもある。このことは、条件節の副詞節で述べられている事柄に対する否定的な判断が主節において直接的に提示されている(47)や否定的な感情が提示されている(48)のような例があることから確認することができる。同様の例を次の(55)(56)で示す。

- (55) 「もう好い。そのくらいで好い。あんまり出すと危ない」と先生が云う。 (夏目漱石「虞美人草」)
- (56) 「いや、あんまり素直に、こちらの申出をみとめていただけると、どうなっているのかと不安になる」 (田辺聖子「新源氏物語」)

ここで、副詞「あんまり」の共起の有無が文全体の意味解釈にどのような影響を及ぼすのかをテストしてみよう。

- (57) たくさん食べたら元気になるよ。
- (58) あんまりたくさん食べたら元気になるよ。

(57)の条件の副詞節に副詞「あんまり」を共起させた(58)は、(57)と比較して程度(量)についての情報が客観的な事柄として増加していると同時に、主節で述べられている事柄を望ましいこととはとらえていない(「元気になる」

ということを望ましくないととらえるのはまれではあるが）という意味解釈が成り立つようになる。このことは副詞「あんまり」にマイナスの評価的な意味が焼き付けられていることのあらわれであると考えられる。

4.3 その他

ここでは、原因・理由の副詞節や条件の副詞節以外で用いられている副詞「あんまり」を一括して取り扱い、その特徴を考察する。

まず、(59)(60)は人あるいは人の行為に対するマイナスの評価付けを表す形容詞やマイナスの感情を表す形容詞と共起している例である。

- (59) 「三日も食堂に出ないで閉じこもっているのに、なんという事務長だろう、一ぺんも見舞いに来ないとはあんまりひどい」
(有島武郎「或る女」)

- (60) お民さんの様な温和しい人を、お母さんの様にアアいつて叱っては、あんまり可哀相ですわ
(伊藤左千夫「野菊の墓」)

人あるいは人の行為に対するマイナスの評価付けを表す形容詞としては「ひどい」以外に「残酷な・だらしない・そっけない・神経質な・冷酷な・乱暴な・水臭い・自分本位な・他人行儀な・のんきな・偽悪的な・失礼な・無理な・意地が悪い・」などを、マイナスの感情を表す形容詞としては「可哀想な」以外に「はずかしい・寂しい・いたわしい・馬鹿らしい・情けない・口惜しい」を実例として採集することができた。また、次の(61)(62)のように人や人の行為に対するマイナスの評価付けを表している動詞句と共起している例もある。

- (61) そんな事は勿論、尋くだけ、野暮さ。可笑しいだろう。いくら片恋だって、あんまり莫迦げている。
(芥川龍之介「片恋」)
- (62) 銭湯へ行ってそのまま家へ帰らないとは、あんまり人を踏みつけて
いますよ。
(太宰治「新釈諸国噺」)

その一方で、マイナスの評価付けを表さない形容詞や動詞(句)と共起することもできる。この場合、次の(63)(64)のように「～過ぎる」という形式になっている。

- (63) ずるいわまアちゃんは！ あんまり要領がよ過ぎるわよ。
(谷崎潤一郎「痴人の愛」)
- (64) あたしはあんまり活動写真の話をしすぎたのかもしれない。
(北杜夫「榆家」)

「過ぎたるは及ばざるが如し。」ということわざがあるように、ある一定の基準を超えたことによって、プラスの評価付けが行われるはずのものがかえってマイナスの評価付けに転換することはよくあることである。この現象は「評価の転換」と呼ぶことができる。「～過ぎる」という形式になっていない場合は、(65)(66)のようにプラスの評価付けを行いながら、一方でそのことに対する不信感や疑念が感じられる。

- (65) 椅子が丁度うまい工合にあったのです。何だかあんまりみんなうまい工合でした。
(宮沢賢治「銀河鉄道の夜」)
- (66) そういえばあの帽子はあんまり僕の氣にいるように出ていました。
(有島武郎「僕の帽子のお話」)

もし副詞「あんまり」が「共起している語(句)の語彙的な意味が表す状態の程度がある一定の基準を超えていることを表す」という事柄としての意味のみを有しているのなら、このような不信感・疑念といった心的態度は感じ取れないであろう。

次に、(67)(68)は名詞節中で副詞「あんまり」が用いられており、主節では名詞節で表されている事柄に対する否定的な判断が行われている例である。

- (67) しかしいくら好きでも、武官室の部下の若い士官たちからあんまり取り立てるのは悪いと思っていたらしく、(阿川弘之「山本五十六」)
- (68) しかし、そうかと言って、あんまり執拗い、急迫した手段で、臼杵家に交際の手蔓を求めるのも、こっちが狼狽しているようでおかしい
(夢野久作「少女地獄」)

これらの名詞節で表されている事柄は、否定的な判断の対象となる事柄であるので、好意的にとらえられていない事柄であるということが出来る。また、(67)の主節を肯定的な判断を表す語(句)に変えた次の(69)が座りの悪い文に

なることから、副詞「あんまり」と文中の他の要素との関係に一定の制約があることがうかがわれる。

(69) ??武官室の部下の若い士官たちからあんまり取り立てるのはいいことだと思っていたらしく、

これまで見てきた副詞「あんまり」がもつ特徴や使用上の制約は、いずれも「評価」という概念がかかわるものであった。このことは副詞「あんまり」にマイナスの評価的な意味が焼き付けられていることのあらわれであると考えられる。

5. モダリティと「評価的な意味」

この節では、モダリティと本稿で考察の対象としてきた「評価的な意味」の関係についての私見を述べる。

モダリティは、仁田(1991)で「現実との関わりにおける、発話時の話し手の立場からした、言表事態に対する把握のし方、および、それらについての話し手の発話・伝達の態度のあり方の表し分けに関わる文法的表現」と定義されている。特に〈言表事態めあてのモダリティ〉⁽⁶⁾は、話し手の現実世界の客観的な事柄に対する主観的なかかわりに関するものである。また、第3節で「現実世界の客観的な事柄を切り取り言語表現化する際に言語形式に焼き付けられる話し手による事柄に対する社会的あるいは個人的な基準に基づく価値判断のありよう」と定義したように、「評価」という概念も話し手の現実世界の客観的な事柄に対する主観的なかかわりに関するものである。しかし、前者は「だろう」「ようだ」「べきだ」といった文末形式や「ああ」「幸い」といった文頭に位置する独立語など、モダリティに関わることを専らとする言語形式が主な考察の対象となってきたのに対して、後者は、一方では現実世界の客観的な事柄(副詞「あんまり」においては状態の程度がある一定の基準を超えていること)を表現しつつ、同時にその事柄に対する社会的あるいは個人的な基準に基づく価値判断のありよう(副詞「あんまり」においては状態の程度がある一定の基準を超えていることが好意的にはとらえられていないこと)が焼き付けられている言語形式が考察の対象となる。現在、「評価的な意味」は、ある個別語彙に含意として存在することが指摘されている(国立国語研究所(1991))が、モダリティの体系の中に位置付けられて

いるわけではない。

「評価」という概念における話し手の現実世界の客観的な事柄に対する主観的なかわりと従来のモダリティについての議論を通じて明らかにされてきた話し手の現実世界の客観的な事柄に対する主観的なかわりを同じ枠組みの中で議論することの可否について明確な答えを現段階で出すことはできないが、第4節で観察した副詞「あんまり」の特徴を見てみると、「評価的な意味」が語彙レベルでの含意として取り扱うだけではなく、従来のモダリティとの異同を含め、広く文法的な枠組みの中に位置付けられるべきものなのではないかと思われてくる。今後の大きな課題として残しておきたい。

6. おわりに

本稿では、否定形式と共起していない副詞「あんまり」を考察の対象とし、実例における使用状況の分析から、副詞「あんまり」が状態の程度がある一定の基準を超えていること（すなわち現実世界の客観的な事柄）を表すと共に、状態の程度がある一定の基準を超えていることが好意的にはとらえられていないこと（すなわち話し手の現実世界の客観的な事柄に対する主観的なかわり）が「評価的な意味」として焼き付けられていることを指摘した。この「評価的な意味」は従来のモダリティについての議論の中では取り扱われておらず、今後、従来のモダリティとの異同を含めて文法的な枠組みの中に位置付けていかなければならないのではないかとの私見を述べた。本稿はそのための第一歩である。

注

- (1)このことについては、国立国語研究所編(1991)に詳しい記述がある。
- (2)形容詞と共起するという特徴は、程度副詞と情態副詞を分類する基準となる。
- (3)量副詞の位置付けについては議論が分かれるところであるが、本稿では程度副詞としての用法と一括して取り扱う。
- (4)時間名詞と共起した実例は残念ながら見つけることができなかったが、「あんまり昔のことなので、どうしても思い出せない。」といった例が考えられる。
- (5)ただし、当該事態が皮肉を込めて述べられている場合は(36)は文法的な文になることもある。
- (6)仁田(1991)の用語。「発話時における話し手の言表事態に対する把握のし方の表し分けに関わる文法表現」と定義されている。

否定形式と共起していない副詞「あんまり」をめぐる

用例出典

『CD-ROM 版新潮文庫の100冊』『CD-ROM 版明治の文豪』及び青空文庫
〈<http://www.aozora.gr.jp>〉に登録されている作品から検索ソフト (QGREP
32) を用いて採集した。

参考文献

- 河西良治 (1998) 『『価値判断』の意味論について』『紀要』文学部第82号 (中央大学文学部)
- 工藤 浩 (1983) 「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』(明治書院)
- 国立国語研究所編 (1991) 「日本語教育指導参考書19 副詞の意味と用法」(大蔵省印刷局)
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』(ひつじ書房)
- 松下大三郎 (1974) 『改撰標準日本文法』(勉誠社)
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『日本語の文法3 モダリティ』(岩波書店)
- 益岡隆志 (1991) 「モダリティの文法」(くろしお出版)
- 山田孝雄 (1936) 「日本文学概論」(宝文館)